影法師

豊島与志雄

青空文庫

一

うしろに山をひかえ前に広々とした平野をひかえてる、低いなだらかな丘の上に、小さな村がありました。村の東の端に、村一番の長者の屋敷がありまして、その塀の外の広場は、子供たちの遊び場所でした。

白く塗った土塀、左手はゆるやかな山すそで、いろんな灌木や草がはえています。前には小さな川が流れていて、魚が泳いでいます。川の向こうと右手の方には、たんぼが続いています。子供たちはその広場でおもしろく遊ぶことが出来ました。

晴れた日の朝早く、長者の子供を交えて三四人の子供が、いつものように、そこで遊んでいました。東の地平線から出たばかりの太陽の光りが、皆の影を白い壁にくっきりとうつしていました。その影があまりはっきりしておもしろいので、皆は影うつしの遊びを始めました。

「ああ、いいことを考えた」と長者の子供がふいに叫びました。「待っといでよ、じきに来るから」

そして長者の子供はいきなり駆け出して、うちの中にはいって行きました。

お祖父さんが、大きなまんまるい眼鏡をかけて、縁側で本を読んでいました。

「お祖父さん、僕にあの……東の塀を下さいよ」と子供は言いました。

お祖父さんは、まんまるい眼鏡の下にびっくりした眼を開いて、子供を見ました。
「なに、塀をくれって……」
「ええ、下さいよ。おもしろいことがあるんです。こわしやしません。ただ遊ぶだけなんです。塀で遊ぶんです。ね、いいでしょう」
「塀で遊ぶって……おかしなことを言う子だね。こわしさえしなければよいけれど……」
「じゃあ下さいね。遊ぶだけなんですから」
そして子供はもうお祖父さんの側から駆け出して、部屋の中にはいって、大きな硯箱を持ち出して、またもとの塀の外に駆けてきました。
「何をするの」
待ってた子供たちが集まってきました。
「今ね、この塀をお祖父さんからもらってきたんだ。だから、こわしさえしなけりゃ、何をしたって叱られやしないよ……これから皆の影法師を、この塀の上に写し取るんだよ」
「影法師を写し取る……うん、おもしろいな」
皆はわーっと声を立てておもしろがりました。そしてすぐにそのしたくにかかりました。小川の水を硯にくみ取って、一生懸命に墨をすりました。早くしないと、太陽が昇ってしまいます。太陽が昇ってしまえば、影法師は小さくなってだめなんです。
「僕が考えたんだから、僕が先だよ」

そう言って長者の子供は、白い塀の前につっ立ちました。その姿通りの影が、白塀の上にはっきりうつりました。それを他の子供たちが、墨をいっぱいふくました筆で写し取りました。

「影法師なんだから、すっかりまっ黒に塗らなけりゃいけないよ」

そして皆は影法師の形をまっ黒に塗り始めました。硯の水がなくなると、また小川の水を汲んできて墨をすりました。

そのうちに、太陽はずんずん昇っていって、塀にうつる影法師は小さな不格好なものになりましたので、長者の子供一人のだけで、他のは写し取れませんでした。

「また明日の朝にしよう」

二

毎日晴れた日が続きました。子供たちは朝早くから白塀の前に集まって、かわるがわる影法師を写し取りました。

そのことをおもしろがって、他の子供たちも集まって来ました。そして太陽が出たばかりの頃、日に二つか三つずつ影法師を写し取りましたが、日がたつにつれて、塀いっぱいたくさんになってきました。高いのや低いのや、肥ったのややせたのが、皆まっすぐを向いてずらりと並びました。墨でまっ黒に塗った影法師ですから、太陽がいくら高く昇っても、太陽が沈んで

晩になっても、ちょうど人がつっ立ってるように、そこに、白い塀の上に、つっ立っています。

それを見て、通りがかりの大人たちは、「えらいことを始めたな」と言いながら、にこにこ笑っていました。長者のうちのお祖父さんも出て来て、大きなまんまるい眼鏡の下に眼をまんまるくして、「ほほう」と感心したように眺め入りました。

「これが僕んですよ」

「これが僕んですよ」

子供たちはめいめいそう言って、自分の影法師の前に立ってみせました。背の高さから形まで、身体どおりの影法師でした。

さて皆の影法師が写し取られて、塀いっぱいに並びますと、これからどうしようかと、子供たちは考えました。写し取っただけではいっこうつまりません。

「影法師が塀からぬけ出して踊ってくれるといいんだがなあ」

そう皆は考えました。そしていつも塀の前に集まっては、何度もくり返して考えました。しかしそんなことが出来るわけはありません。

ところが、ある日、皆がやはりそこに集まって、同じことをこそこそ話し合っていますと、いつのまにどこからやって来たか、髪の長い見馴れない男が、そばにつっ立って笑っています。

「君たちはばかなことを考えてるね」

そしてやはり、塀の影法師を見て笑っています。

子供たちはそれがしゃくにさわりました。髪の長い見馴れない変な男ですけれど、それもかまわずに、皆でつめよっていきました。

「何を言ってるんだい。何がばかなことなんだい。影法師を踊らせようとするのが、何がばかなことなんだい。おもしろいことじゃないか」

見馴れない男は、さも愉快そうに、はっはっ……と笑いました。そして言いました。

「なるほど、私が悪かった。それはおもしろいことに違いない。……それでは一つ私が教えてやろうか。その影法師を踊らせることを、教えてやろうか」

「え、おじさんはそんなことを知ってるの。教えて下さい。ね、教えて下さい」

「じゃあ教えてやろう。そのかわり、私の影も一つ、そこに写し取ってくれなくてはいけない。そして、明日の朝早くここに来れば、君たちの影法師は踊れるようになってるだろう」

子供たちは大変喜びました。そして塀の片隅の空いてるところに、見馴れぬ男の影法師を写し取りました。もう太陽が高く昇っていましたので、男の影法師は低くぴしゃんこになって、おかしな格好でした。

「だめだよ、日が高くなってるから……。おかしいな」

「いや、それで結構だ」

そして男は、自分の変な影法師を見て、はっはっは……。と笑いました。

「それでは、明日の朝早く皆でそろっておいでよ」

男はそう言いいすてて、どこかへ行ってしまいました。

三

子供たちはその晩、おちついて眠れませんでした。自分たちの墨絵の影法師が、塀からぬけ出して踊りはねるというんですから、待ちきれませんでした。翌朝は早くから眼をさまして、皆誘い合わせました。大人たちが何かたずねても、今にびっくりさしてやるという気持ちで、まじめくさった顔をして黙っていました。

やがて皆そろいましたので、胸をどきどきさせながら、長者の屋敷の東の白塀のところへやって行きました。

ところが、一目見ると、皆はあっと口の中で叫んだまま、おどろいて立ち止まりました。皆のおもしろい影法師がいっぱい立ち並んでいた白塀は、一面に何かでまっ黒に塗られてしまって、そのまっ黒な色がまたひどく濃くて、いわば闇の鏡みたいになっているのです。影法師どころか何一つ見えないで、ただ一面にまっ黒なだけです。

「はっはっはっは……」

高い笑い声がしたので振り向くと、昨日の男がそこに立って笑っています。

「私のあのおかしな影がね、一晩のうちに大きくなって、塀いっぱいにひろがったのだ。とん

だことになってしまった」

それを聞くと、子供たちは急に怒り出しました。その男がだまかしたのだ。嘘を言ってるんだ。影法師が一晩のうちに塀いっぱいに大きくなるなんて、そんなことがあるものか。その男が塀をまっ黒に塗りつぶして、皆の影法師をなくしてしまったのだ。

「嘘つき、嘘つき。僕たちをだまかしたんだな」

そう言って子供たちはつめよっていきました。

「はっはっはっ……」と男は平気でなお笑っています。

「人をばかにしてる。なぐっちまえ」

気の早い子供たちは、棒ぎれを拾ったり、石をつかんだり、げんこを握りしめたりして、男へ向かっていきました。男は笑いながら、あちこちへ身をかわしました。ひどくすばしこい影のような男で、大勢でいくら追っかけても、つかまえることが出来ませんでした。

「君たちはばかだな」と男は広場の中を逃げ廻りながら言いました。「そら、まっ黒な塀の中で、影法師が踊ってるじゃないか」

そう言われてから皆は初めて気づきました。東から出た太陽の光を受けて、黒い鏡のように光っている塀の中に、皆の影法師が浮き出していました。白塀にうつったのとちがって、奥深いまっ暗な中にうつってるものですから、そうはっきりはしていませんが、すかして見ると、ちょうど生きた人間のように浮き出しています。それが、皆が動くにつれてあちこちへ動き廻

って、大勢の本当の子供たちが踊ってるようなんです。

「おや、これはおもしろいや。ふしぎだなあ」

皆は黒塀の鏡に影法師をうつして、ふしぎそうにのぞきこみました。眼や口や鼻までそっくり見えて、向こうにも同じ生きた子供たちがいるようなんです。

「わかったかね、はっはっは……」

皆が振り返ってみると、髪の長い見馴れぬ男は、なお笑いながら立ち去って行きました。引き止めるまも何もなく、まるで宙を飛ぶようにして、山の方へ見えなくなってしまいました。子供たちはあっけにとられました。

そこへ、長者のうちのお祖父さんが出て来ました。子供たちは昨日からの話をしました。お祖父さんはびっくりしたように、まっ黒な塀を見ていましたが、しまいに言いました。

「それはきっと、大変えらい人にちがいない。お前達はよいことを教わったものだ」

子供たちはさっぱりわけがわかりませんでした。けれど黒塀の鏡が出来たのはうれしいことでした。朝日のさしてる時ばかりでなく、午後になっても、月が出てれば夜分でも、黒塀の鏡は皆の姿をうつし出してくれました。それもただの影法師ではなく、生きた人間と同じ姿なんです。

皆はいろんな姿をうつして、自分も踊り影の姿も踊らして、いつも大変愉快に元気に遊びました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社
1990（平成2）年11月27日第1刷発行
入力：kompass
校正：門田裕志、小林繁雄
2006年4月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

影法師

豊島与志雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/